

第75回

“社会を明るくする運動” 埼玉県作文コンテスト

入賞作文集



更生ペンギンの
ホゴちゃん

“社会を明るくする運動” 埼玉県推進委員会

はじめに

法務省が主唱する「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラは、すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちや非行をした少年たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な地域社会を築こうとする全国的な運動です。

本運動の一環としての作文コンテストは、次代を担う小・中学生の皆様には、日常の家庭生活、学校生活の中で体験したことを基に、犯罪・非行のない地域社会づくりや犯罪・非行などに関して考えたこと、感じたことを作文に書くことを通じて、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的としています。

本書は、応募のあった埼玉県内の小・中学生三三八〇作品の中から、入賞作品を収録したものです。小・中学校の児童生徒の皆様はもとより、学校の先生、保護者の皆様など一人でも多くの方々に読んでいただき、青少年の健全育成・非行防止に役立てていただくとともに、「社会を明るくする運動」に対する一層の御理解・御協力をいただければ幸いです。

終わりに、この作文コンテストの実施にあたり、多大な御尽力をいただいた埼玉県及び県内の各教育委員会や学校関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

令和八年一月

「社会を明るくする運動」埼玉県推進委員会

目次

優秀賞

〈小学生の部〉

全国保護司連盟理事長賞・埼玉県更生保護女性連盟会長賞	加須市立騎西小学校	関口心春	2
言葉の力	加須市立騎西小学校	関口心春	2
社会を明るくする運動	埼玉県推進委員会委員長(埼玉県知事)賞		
礼ぎの大切さ	小川町立小川小学校	高瀬仁照	4
さいたま保護観察所長賞			
相手の気持ちを考える	羽生市立羽生南小学校	杉本彩純	6
無人販売所で盗む人たち	ふじみ野市立東原小学校	野田祥玄	8
埼玉県保護司会連合会長賞			
社会を明るくするボランティア活動	羽生市立須影小学校	西村笑迦	10
埼玉県更生保護観察協会理事長賞			
ペットがくれるはんざいのない社会	ふじみ野市立東原小学校	堀幸希	12
埼玉新聞社長賞			
それって本当に、やっていい事?	宮代町立須賀小学校	山本幸奈	14

優秀賞

〈中学生の部〉

社会を明るくする運動、埼玉県推進委員会委員長（埼玉県知事）賞

社会の明るさを創るものとは…………… 鴻巣市立鴻巣中学校…………… 瀬尾 颯 静 18

さいたま保護観察所長賞

よりせい…………… 草加市立谷塚中学校…………… 藤 代 斗 真 20

罪を犯した人の今後…………… 宮代町立前原中学校…………… 川 島 実 生 22

埼玉県保護司会連合会長賞

社会を明るくするために私たちにできること…………… 蓮田市立黒浜中学校…………… 和久井 雪 邑 24

埼玉県更生保護観察協会理事長賞

明るさの種と花咲く社会…………… 春日部市立江戸川小中学校…………… 細 谷 心 海 26

埼玉県更生保護女性連盟会長賞

みんなの社会…………… さいたま市立宮原中学校…………… 阿久澤 快 斗 30

埼玉新聞社長賞

雰囲気作り…………… 川口市立安行中学校…………… 千代岡 晃 佐 32

用語解説

.....

36

入賞者一覧

.....

38

学校特別賞受賞校

.....

39

優 秀 賞

小学生の部 七点



埼玉県ご当地ホゴちゃん
サイ玉ホゴちゃん

全国保護司連盟理事長賞・
埼玉県更生保護女性連盟会長賞

言葉の力

加須市立騎西小学校六年 関口 心春

「社会を明るくする運動」って何だろうと調べたときに犯罪や非行を防ぐだけでなく、過ちを犯した人が再び社会で生活できるよう支援し、地域全体で安心して暮らせる社会をつくろうとする全国的な活動だと知りました。正直子どもの私たちには、難しいなと感じましたが、子どもである私たちにもできることを教えてもらいました。それは「言葉の力」です。

私たちが日常で使っている「言葉」には、目には見えないけれど、大きな力があります。私たちが、発した一言で人をはげまし、支え、前に進む勇気を与えることがあります。

例えば、朝友達に「おはよー」と声をかけると、その友達も返してくれてとてもうれしくなり、1日を楽しく過ごすことができます。逆に、心ない一言は相手を深く傷つけ、自信や希望をうばってしまふこともあります。「どうせ出来ないよ」「君には出来ないでしょ」と言った否定的な言葉は、相手の努力する気持ちをうばい可能性の種をなくしてしまいます。失敗した人に「大丈夫だよ」と伝えることで落ち込んでいた心を救い、再びちよう戦する力ができます。私たちは、日々の生活の中で言葉をどう使うかちゃんと考えていくことが必要です。

あいさつや感謝の一言、はげましの言葉。これらはどれも簡単にでき、相手の大きな支えになります。

実際に、私はバレーボールの試合でサーブを失敗し相手に連続得点を許してしまったことがあります。そのとき、私は自分のせいでチームが負けてしまうのではないかと不安でいっぱいになりました。

た。けれども、そのとき、仲間の一人が「次は大丈夫。いっしょにがんばろう。」と言ってくれました。私は、その一言で救われました。ずっと自分をおいこんでいたけれど気持ちがいっしょに「やるぞー」に変わりました。

この経験から、言葉には人を変える力があると強く感じました。そして、その力を良い方向に使えば、みんな安心できる社会をつくることにつながるのだと思いました。社会には、さまざま困難を抱えている人がいます。失敗した人、こ独を感じている人、居場所を見失っている人、そうした人たちに必要なのは、決してきびしい言葉や冷たい視線ではなく、支え合いと温かい言葉だと思っています。「いっしょにがんばろう」「応援しているよ」という声が広がれば、私のように力がわいてきて人は再び立ち上がることができます。そして、その積み重ねこそが、社会を明るくしていくとことです。私たち一人ひとりが言葉の力を前向きに使えば、家庭では親子の絆が深まり、学校では友情が広がり地域では互いを思いやる心が生まれるでしょう。そのような社会では犯罪やいじめは少なくなり、全員が安心して暮らせるはずです。社会を変えるのは、大きな力を持った人だけではありません。私たち一人ひとりの小さな心が何個も何個も集まることで、大きな力ができるのです。だからこそ、私はこれからも「言葉の力」を信じ続け、あいさつや、感謝の気持ちをおすれずにどんどん広め伝えていきたいと思っています。社会を明るくする運動は、決して特別な活動ではありません。ふだんの生活の中で小さな言葉の積み重ねが、その土台になるのです。私たちの何気ない言葉が人の心を明るく照らし未来を希望でいっぱいにしていくのです。

だからこそ、私は願います。みんなが言葉の力を大切にして、温かい未来の社会を築いていけるように。私もその一人として日々の生活の中で1つ1つの言葉をていねいに大切に選び社会を明るくする一歩をふみだしていきたいと思っています。

社会を明るくする運動 埼玉県推進委員会委員長(埼玉県知事)賞

礼ぎの大切さ

小川町立小川小学校四年 高瀬 仁照

夏休みに家族と出かけ、バスやタクシーに乗っておりの時などに、「ありがとうございます。」と大きな声でお礼を伝えると、運転士さんが笑顔で「またおいで。」と言ってくれたり、出かけたレジャー先でも、スタッフさんに「こんにちは」のあいさつや、お礼をしつかり伝えると、スタッフさんがさらに笑顔で親切にしてくれることに気づきました。

たった一つのあいさつや「ありがとうございます」の言葉で、さっきまで知らない人だった相手や、まるで友だちになったように温かく感じました。

あいさつやお礼を言うことは、大切な礼ぎだと、学校の先生や家族やマンガからも教えてもらいました。礼ぎを辞書で調べると、「社会生活をしていくために、人間として守らなければならないきまり。とくに、人を敬う気持ちをあらわす作法」そして、敬うというのは「相手を尊敬する」とありました。

人を敬うというのは、相手を大切にすることでもあるから、だから相手も、ほくを大切にしてくれるのかなと思いました。

ある日の晩ごはんの時、ぼくがご飯をおかわりする時に、ついつい、だまって、お茶わんを、お母さんに差し出してしまいました。お母さんが残念そうな顔をしたのに気づいてぼくは、あわてて「おかわりお願いします。」と言いました。そのときぼくは、家族であっても、いえ、家族だからこそ、礼ぎやありがとうの言葉を伝えることは大切だと思いました。そして、礼ぎというのは、相手へ

の、ありがたいの気持ちをおくることなんだと気づきました。

ぼくも、誰かからあいさつやお礼を言われると、相手にもっとやさしくしたり、助けてあげたいと思うようになります。礼ぎは、自分と相手を平和にするものだと思います。

以前にぼくは、ほごしをしている、おじいちゃんから、「けいむ所の中でも、今は、受けい者の人に対して、名前を、さん付けでよぶようになったんだよ。」と聞きました。

ぼくはそれを聞いて、たとえはんざいをおかした人であっても、呼びすてや番号で呼ぶよりも、さん付けの方が失礼じゃない気がするし、こちらが礼ぎをもって接しないと、相手も、礼ぎのことを学べないのではないかと思いました。そして、受けい者の人たちも礼ぎの大切さを学べば、自分のおかした罪に対して、反省が深まるのではないかと思いました。

ぼくも、おかわりをする時、感しゃをこめて「おかわりお願いします。」と言うんだなど、学びました。礼ぎを大切にすると、自分の心が温かくなることも気づきました。きっと礼ぎは社会を明るくしていく力だと、ぼくは信じています。

さいたま保護観察所長賞

相手の気持ちを考える

羽生市立羽生南小学校六年 杉本 彩純

ニユースでよく耳にするオレオレ詐欺の電話が去年祖母にかかってきました。祖母の話では息子を名乗る男が「会社のお金を使いこんでしまったのでお金が必要だ。」と訴えてきたそうです。祖母はすぐに詐欺だと気付きましたが、気付いていない振りをしていくら必要なのか尋ねたら「一千万円必要」と言ってきたそうです。「そんなお金うちにはないの分かっているでしょ。」と言うと、「五百万円でもいい。無理なら三百万円でもいい。」とどんどん金額を下げてきたそうです。「お前は悪いことをしたのだから警察に行つて刑務所に入りな。」と祖母が言うと、電話は切れたそうです。

祖母から話を聞いた時、ニユースの世界の話が現実に変わり、騙されずにやり返した祖母は凄いなと思いました。

そこで疑問がうかびました。騙されてしまう人と騙されない人の違いは何だろうという疑問です。人を信じやすい人、疑い深い人、性格の違いもあると思います。しかし一番の要因は普段からコミュニケーションを取っているかどうかではないかと思いました。

祖母は私の家族と一緒に住んでいて、日頃から会話をしています。祖母は息子（私の父）がそんな悪い事をしないと分かっていたし、信じていたし、電話の声も息子ではないと気付きました。電話を通して聞く声は直接聞く声と少し違って聞こえたりしますが、いつも声を聞いていれば違いが分かります。コミュニケーションは本当に大切なのだと実感しました。

ではオレオレ詐欺をしている人たちは、どうして人を騙してお金を取るという悪い事をしてしまう

のでしょうか。そこに罪悪感はないのでしょうか。騙す相手は知らない人で、自分も誰かになりずましているから心が痛まないのでしょうか。

それはSNSでの誹謗中傷と同じようだと思います。自分が言われたらとても傷つき、悲しくなる事でも、相手が見えない、自分も相手から見えないという匿名の環境であるから書き込んでしまうのだと思います。実名であったら同じ事を書き込めないと思います。

私はどうしたらこのような問題を解決できるのか考えてみました。

インターネットは世界中のどんな人でも見ることができません。私自身分からないことがあるとすぐに検索して調べます。それはとても便利ですが、中には間違っている情報もあることを忘れてはいけません。色々な情報の中から正しい情報を探すという事がとても大切です。逆に言えば自分が発信した言葉を世界中のたくさんの人が見ているかもしれないから、自分が発信する言葉や内容をしっかりと見直して正しい内容か確認することが大切です。また、その言葉が誰かを傷つけないか、困らせないかよく考えることが重要だと思います。

匿名だから悪いことも人を傷つけることも言ってしまうからといって、匿名を無くしてしまうことはできません。個人情報が発信に使われたり巻き込まれたりするからです。個人情報を知られないようにすることもとても大切です。私はSNSに何かを発信したことはありませんが、これから発信することがあったら自分の名前や家などが分からないかなどしっかりと確認しようと思います。

社会を明るくするには犯罪のない誰もが安心して暮らせる世の中にするのが大切です。これをインターネットの世界で考えると、相手を思いやる気持ちが大切になります。匿名だからと言って思いやりのない言葉を書きこんだり、正しい内容か確認せず簡単に情報を拡散するのは間違っています。目の前の人と話すように言葉を丁寧を選び、それを見た人が傷つかないか、悲しい気持ちにならないか、困らないかしっかりと考えて発信することが大切です。これからみんなが相手のことを考えて、みんなが安心して暮らせる明るい社会になることを願っています。

さいたま保護観察所長賞

無人販売所で盗む人たち

ふじみ野市立東原小学校四年

野田 祥玄

無人販売所で、お金を払っていないのに、勝手に野菜などをうばってしまう犯罪を、ぼくはニュースで見て、悲しくなりました。その人たちは、お金が払えないわけではなくて、お金があるのに、持って行ってしまいました。

理由は、様々でした。大して高くないんだから、もうけたいわけじゃないはず、と値段が安いからと見下している人。少しだけ払って、たとえばバナナなら、黒く痛んでいる部分の分を勝手に自分の中で割り引きして金額を入れた、だからタダで持って行ったわけじゃないし、万引きしたわけじゃないと聞き直る人。

一つ買ってこっそり二つ持っていく人や、百円玉のかわりに十円玉だけ入れる人もいました。

ぼくは、盗んでしまう側の気持ちを考えてみました。無人販売所は、スーパーと違って、人通りが少ない所が多いです。だから、誰にも見られてないから、簡単に盗めるって思うんじゃないかなと思います。でも、見られなければいい、バレなければいいっていうのは、どんな犯罪でも同じだし、一番最悪な考え方なんじゃないかなと、ぼくは思います。

それなのに、無人販売所で万引きする人たちは、注意されても、警察を呼ばれるまでは、逆に怒り出す人ばかりで、全然、反省していないし、自分が悪いことをしている意識もなさそうでした。

もしかしたら、その人たちの心の中にあるのは「自分さえよければいい」という気持ちなのかなと思います。自分のことしか考えてないから、勝手に割り引きした金額を入れたり、凶々しくなるん

だろうと思います。

ぼくはそんな人たちが、生産者の人が一生懸命作った野菜や果物を食べているなんて、作っている人たちは、怒るよりも悲しい気持ちの方が多いんだろうなと思いました。

でも、万引きをする人たちの中には、本当に治したくて苦しんでいる人もいて、クレプトマニアという、盗みをしてしまう病気の人もいます。ぼくは、単にお金を払いたくないだけかと思っていたので、病気で苦しむ人がいるなんておどろきました。その人たちは、同じ病気の人たちと、交流会を開いたりして、犯罪を繰り返さないように努力しているそうです。

これからどうしたらよいか、ぼくは四つ考えました。

一つ、「いつもお金を払ってくれてありがとう」とポスターを貼る。みんなは払っているのに自分だけはやっていないことを気付かさせるため。

二つ、防犯カメラを増やす。

三つ、お金を入れないと取れない仕組みにする。

四つ、一人一人が、利他的な気持ちを持つ。

一つ目は、すぐ出来るけど、二つ目と三つ目は、お金がかかるので、みんなでお金を集められたらいいと思います。

四つ目の利他的という言葉は、この夏に覚えた言葉です。自分の利益をぎせいにしても、他人の幸福や利益を優先する態度や行動のことだそうです。ぼくは、そんな気持ちをみんなが持てたら、せっかく作ってくれた野菜をとるような人はいなくなると思います。そんな社会になればいいなと思いました。

社会を明るくするボランティア活動

羽生市立須影小学校五年 西村 笑迦

「社会を明るくする運動」の作文を書くことになり、まずどんな運動なのかと調べました。「犯罪や非行をしない、くり返さないために何ができるかを考え、力を合わせて安心な明るい社会を作るための運動」と書いてありました。わたしのおじいちゃんは保護司を十三年、おばあちゃんは更生保護女性会の活動をしていました。保護司は、犯罪や非行をした人の立ち直りを支える民間ボランティアです。おじいちゃんは担当した人の話をしてくれました。対象者が決まると月一回の個別面談をするのですが、面談の日にきちんと来る人は最後は仕事に復帰できる事が多かったです。特に思い出に残る人は日本語が分からず、その人の家族が通訳していたそうです。毎月家族で面談に来てくれて家族でなぜ罪をおかしたのか、この先どうすれば良いのかをたくさん話をして、最後は笑顔でお別れをしたんだとうれしそうに話してくれました。おばあちゃんは、公民館や集会所で子育て支援をメインに活動していました。お母さんが子育てに行きづまり、子供へのぎゃくたいや育児ほうきになってしまってお母さんがふえていて、親子のふれあい行事をたくさんやってきたと話していました。

わたしのお父さんは消防団員、お母さんは母子愛育班の役員をやっています。わたしのまわりには地域のためにボランティア活動をしている人ばかりいます。今、わたしに出来る事は何かを考えました。まだ小学生なので家族みたいな活動はできないけれど、今、わたしができる事は、こまっている人がいたら声をかけ助けようと思います。「どうしたの?」「わたしが手伝える事はある?」と聞いてみようと思います。わたし一人でむずかしければわたしの友達をよんでみんなで解決したいと思いま

す。友達みんなでも解決できない場合は先生や親や大人に助けを求めたいと思います。

もう一つは、いつも親から言われている「あいさつ」をする事です。うちはお寺です。たくさんの人がうちに来ます。わたしは大きな声で「こんにちは」と言うようにしています。あいさつをするときみんな笑顔で「こんにちは」と返してくれます。あいさつすれば明るい社会になると思います。今はまだこのような小さな事しかできないけれど、もう少し大きくなったら地域のボランティア活動もやりたいと思います。わたしは家族みんなが大好きです。「社会を明るくする運動」に関わっている家族をほこりに思います。

埼玉県更生保護観察協会理事長賞

ペットがくれるはんざいのない社会

ふじみ野市立東原小学校三年 堀 幸希

ぼくの家は動物病院です。ぼくはたくさんのペットとペットのかい主さんに出会ってきました。そしてぼくの家でも犬を二ひきとねこを一ぴきかっています。ぼくにとつてペットとすこすこということはあたり前のことになっていきますが、他の人たち、とくにはんざいやひこうをってしまった人はペットとかかわりがあるのかな、かわることができたらどうなるのかなとはんざいのない社会を調べていく中でぎもんにおもい考えてみました。

ペットをかうことよつて人はとてもいやされます。動物はともかわいいです。だつこをしてほしがつたりなめてくれたり、ごはんをあげたらしつぽをとつてもふつてつてもよろこんでくれます。いつでもなでさせてくれて安心します。何かいやなことがあり、かなしくなつてるときに、いつも元気をくれるそんざいだとはくは思います。おこつた気持ちやふあんな気持ちではんざいをしてしまう人をひきとめるやくわりをはたしてくれると思うのです。いっしょにねたり、毎日をいっしょにすこしていく中で、はんざいをしてしまった人の心の元気をとりもどして、がんばつてすこすこと思わせてくれます。

次にペットの世話をするにはせきにんを持たないといけません。もし自分がペットにごはんをあげなかつたり面どうみてあげられなくなつてしまつたら、この子たちは死んでしまふ。そう思うことでこの子たちのために生きていふうに思うことができるようになります。そしてもし自分のはんざいをしていなくなつてしまつたらこの子たちはどうなつてしまふのかと思うことで、はんざい

をしなくすることができます。そうすることで、自分の生きている意味をペットがあたえてくれると思います。

またペットがいると全くさびしくなくなります。ペットたちは自分のことを全力であいしてくれます。そしてぴったりと自分のそばにいてくれます。はんざいをしてしまった人のまわりからはだれもいなくなってしまうそうですがペットはかい主さんがはんざいをしたかなんて気にしません。社会でひとりぼっちなじょうたいもなくなしてくれます。さらにペットといっしょにすむことによって、きそくたらしい生活がなくなります。えさをあげる時間やさん歩に行くじかん、トイレの交かんなど、時間どおりにやらなければいけないことがたくさんあります。それらをやっていくことによって、社会の中で他の人とすごしていくための力をまなびなおせるきかいになると思います。だれかのためにルールをまもり、がんばるといふやさしさをペットはうみ、もういちどはんざいをするをためてくれると思います。

はんざいのない社会を作るためにたくさんの方のことをあたえおしえてくれ、いつまでもいっしょにすごしてくれるペットはぼくたちや、はんざいやひこうをしてしまった人にも大切なそんざいなんだなと気づくことができました。これから自分がかっているペットをだいにして、ペットがたくさんいてはんざいのない社会になっていけばいいなと思います。

それって本当に、やっつていい事？

宮代町立須賀小学校三年 山本 幸奈

みなさんは、「社会を明るくする」って、どういう事なのか分かりますか。わたしは、人と人が、よい事につながる事だと思います。

わたしは、友だちと一しょに、公園で遊ぶ事が、大好きです。とくに、同じしゅみの話をしながら、ブランコにのつている時が楽しいです。そんな楽しい事にも、ルールがあります。自分たちが、楽しいからといって、ブランコのじゅんばんをまもらなかったら、ブランコにならない人は、いやな気持ちになると思います。そしてみんながすわるブランコにくつで立ってこいだら、ブランコが、よごれてしまい、次に使う人に、めいわくをかけてしまいます。わたしは、自分たちが、楽しむ事も大切だけれど、相手を思いやって、ルールをまもったじょうたいで、楽しむ事が、ひつ要だと思います。この作文を書くまでは、公園で、大きいお兄さん、お姉さんが、ブランコの立ちこぎをしているすがたを見て、「すごいな、おもしろそうだから、わたしもやりたいな。」と思ったのが、きっかけで、わたしも、ブランコの立ちこぎをしていました。今になってよく考えたら、小さな子が、わたしを見てまねをしたら、けがをしてしまうし、ブランコもよごれてしまうので、やめた方が、いいと思います。

しかし、よく考えれば分かる事も、楽しい時は、自分の都合のいいように考えてしまうし、やっつてよい事と、やめておいた方がよい事との区べつがつきにくいと、思いました。

それは、タブレットでも、同じだなと思います。ちよつとならいいだろうと思って開くと、自分で

は気づかないうちに、高いお金をはらう事になったり、れんらく先などのこ人じょうほうをぬすまれてしまったりします。社会のルールがまもれなかった時や、やってはいけない事を、してしまっているじょうたいに気づけなかったら、家ぞくや、社会にめいわくをかけてしまうと思います。

人と人とのつながりは、よい事だけでなくわるい事もあると思います。どんな時でも、一人ひとりが、よい事、わるい事のはんだんを、きちんとできる様になってほしいです。そうすれば、自ぜんと、みんながえ顔になって、明るい社会になると思います。そして、一どわるい事をしてしまった人には、もう二どと、やらない強い心を持ってほしいです。

「だれも見えないから大じょうぶ。」「前回平気だったから、今回も大じょうぶ。」と、よく分からない自しんは、すてて、どんな時も、正しいはんだんができる人に、生まれかわってほしいです。

優 秀 賞

中学生の部 七点



埼玉県ご当地ホゴちゃん
サイ玉ホゴちゃん

社会を明るくする運動 埼玉県推進委員会委員長(埼玉県知事)賞

社会の明るさを創るものとは

鴻巣市立鴻巣中学校三年 瀬尾 颯静

「愚かな人間がルールを増やす」と誰かが言った。僕たちはルールの中で生きている。ルールに守られ、ルールに縛られて生きている。

僕は中学生になり、生徒会長になった。立候補したときの気持ちは、自分の生活する学校という場をより楽しく充実したものにしたいという、単純にワクワクするものだった。しかし、いざその立場になってみると、物事はそう簡単ではなかった。まとめる立場になってみると、自分の正しいと思うことと全体の空気や流れは必ずしも一致しないという当たり前のことに気付く。

物事に対する見方や考え方は、個人によっても違うし立場によっても異なる。ましてや僕たちは中学生だ。まだまだ経験値も判断力も未熟だ。友人関係や学校行事や部活動などでちょっとしたトラブルにあうたびに悩むことになる。

自分が正しいと思うことと相手が正しいと思うことがズレているとき、僕たちはどうしたらいいだろう？正しい道はこれだ、と言って大多数の意見で少数派を切り捨てるのは簡単だ。でもそれでいいのだろうか。

学校生活でも社会生活でも、多数が共存するためには何らかの基準が必要だ。それが「ルール」であり、それを外れることに対しては何らかのペナルティが課される。だから人はルールを守る。それでうまく回る。大多数が守っていることでも守らない人が出てくると、そこにまた新しいルールができる。これが「愚かな人間がルールを増やす」ということだ。人が自らの手で自らの首を絞め、生き

づらい世の中にしてしまう。また、ルールやペナルティがあることにより、逆にそれに対抗する気持ちが生まれてしまうこともある。中学生でいえば、校則があるから破りたくなったり、決まりから外れることを格好よく思ったりという単純な気持ちだったりするかもしれない。せつかくよくするためルールであっても、うまくその流れに乗れなかったり、つまずいたり、不満が生まれたときにそれをうまく表現できなかったり、それをしても受け入れられなかったときに、人はとんでもない行動に出してしまうことがある。それが犯罪や非行となり社会に暗い影を落とすのではないだろうか。

中学校生活においても、犯罪や非行とまでいなくても、生活のあちこちに火種が落ちていると感じることがある。

僕が気をつけることは「それに気づく」ことだ。

伝わらないもどかしさや、認められない苦しきさや、自分がルールに収まることのできない部分が人を追い詰めてしまう。僕も大多数の意見を受け入れられなかったり、自分の我を通したくなった時、言いようのない苦しきさを感じた。何が正しいかということとは、本当に難しく、すべての人間にとって良い社会というのは実現不可能なのかもしれない。

それでもいろいろ価値観に目を向け、あらゆる考え方に耳を傾け、人の心の動きに気付き向き合っていくことで見えてくるものがあるのではないかと僕は思う。

僕たちはルールの中で生きている。ルールに守られルールに縛られて生きていく。でもそのルールを創っているのは僕たち自身だ。一人一人が広い視野を持ち心を柔らかくして伝えあって分かり合っていくことがより良い未来への、遠回りなようで一番の近道なのではないだろうか。

今中学生の僕はそう思っている。

さいたま保護観察所長賞

よりそい

草加市立谷塚中学校三年 藤代 斗真

ほぼ毎日のようにニュースで事件が取り上げられている昨今。報道されていないもの、私たちの耳に届いていない小規模なものも含めると、数えきれないくらいの犯罪が起こっていることだろう。犯罪のない社会をつくるためには、『その人をわかってくれる人がいる』ことが大切だと思った。

当作文の執筆にあたって、祖母がこんなことを話してくれた。

祖母が小学校六年生の頃、父が家に帰らなくなる。母親は何も言わなかったが、変だなと思うようになった。中学時代はなんとかしのいだものの、なぜ出ていったのかという疑問や、家族を捨てたことへの憎しみからすさんでしまい、高校に入ると学校に行かずバイトに明け暮れるようになってしまった。自分を可愛がってくれる大好きな父がないショックから、非行もするようになる（警察沙汰になるほどのことではなかったが。）

しかしそんなときに、当時の担任と学級委員長が毎朝家まで迎えに来てくれた。最初はかたくなに登校を拒んでいたものの、二人が根気強く訪問し続けたことから根負けして学校へ行くように。担任の先生や学級委員長、そして母親は、すさんだ状態の祖母を丸ごと受け入れ、何もなかったかのように普通に接してくれたようだ。次第に祖母は、大手ファッション会社で働きたいという目標を叶えるため、ちゃんと登校し、高校生活に励むようになった。

祖母は担任の先生や学級委員長、母親や高校の友人などの周りの人たちが「何で来ないんだ？」とも言わずに理解してくれたおかげで立ち直ることができた。しかし、世の中には自分のことを理解し

てくれる人がおらず、祖母のように立ち直ることができない人も大勢いる。いじめられているのに、家族も信じてくれず、学校や教育委員会も隠蔽、苦しみの果てに自死を選んでしまったという話も聞いたことがある。自分が死ぬのではなく、腹いせに殺人などの凶悪犯罪に手を染めてしまうケースも多いことだろう。だが、罪のない人の犠牲が生じ、遺族から恨まれ、出所できても社会復帰が難しく、余計に悲惨な人生を歩むことになってしまふ。報道によって、家族から虐待を受けていた、不特定多数から誹謗中傷されていたなどの事実が明るみになっても、うわべだけで理解する人は増えるだろうが、真に寄り添ってくれて、その人の人生を軌道修正してくれるような人はなかなか現れないだろう。

私はこれまで、犯罪を犯した人には極刑を与えるべき、もつと厳しく裁くべきという考えだった。しかしこの執筆を通して、そもそも犯罪を防ぐにはどうすれば良いのか？という本質的な面についても考えを深めることができた。冒頭で述べた通り、その人のことを理解し、寄り添ってくれる人が一人でもいれば、非行や犯罪の少ない社会が築かれると思う。理解はできても具体的な行動に移すのは難しいかもしれない。だが、ほんのひとこと声をかけたり、表情を気にしたりするだけでも変わってくるだろう。大きな言い回しかもしれないが、私も誰かの生きる理由になりたいと思った。

さいたま保護観察所長賞

罪を犯した人の今後

宮代町立前原中学校三年 川島 実生

「罪を犯した人は、一生その罪を償い、罰を与えるべきだ」と誰もが思う、私はそうだと考えていた。

最近のニュースは殺人事件が多い。私は福岡県でおきた娘を殺害したというニュースに衝撃を受けた。

母親には病気の娘がいた。母親は昼夜を問わない介護や養育を五年以上続けていた。そのため責任や非難が大きくなり、殺害をしたという。結果、保護観察のついた執行猶予となった。

本当に母親はもう罪を犯さないだろうか、と私は半信半疑だった。また保護観察とは何かが気になった。それは犯罪や非行をした人が社会の中で更生するように、指導や支援を行う制度というものだった。具体的には、面談で生活状況を把握したり、経済的な自立をサポートしたりしているものだ。この制度によって二度と罪を犯さないようにしているのだと初めて知った。

しかし、なぜそこまでして一度でも、罪を犯した人を助けるのだろうかと思った。そこで私は「支え」が関係しているのではないかと考えた。人は誰だって間違えたり、つまずいたりする。私は小学生の頃、友達との間で、自分の意見だけ誰にもわかってもらえず、自分の意見が言えなくなってしまうことがある。私は（自分だけが、みんなと違う）（なんと言ったらみんなに共感してもらえるだろう）と考え、友達としゃべるだけでも怖くなってしまった。そのとき母は私が必死に話している

ことを、共感するように聞いてくれた。それが私の心の支えとなっていた。そして母は言った。「分かってもらえないことが間違っているわけではないよ。共感してもらえるかは話してみないと分からないし、共感してもらえなくても、自分とは違う考えもあるのだと学べるよ。」

この言葉はずっと私の心に刻まれている。私はこの出来事を振り返り、「共感し合い、支え合える社会」を作ることが大切だと気付いた。

保護観察という制度も、罪を犯した人を支える活動である。私も保護観察での活動のように、誰かの手助けをし、その人の支えとなり、お互いに支え合える社会を作りたいと思った。

事件となった母親や娘は、誰にも助けを呼べなかったのだと思う。

私は、支える社会を作るために、三つのことを実践してみようと思う。

一つ目は、困っている人に気付くことだ。困っている人は、自分から口に出すことが難しいと思うため、周りを見て、何かに悩んでいるのかなと気付けるようにしたい。そして、その人の大切な言葉に耳を傾け、声を出せる空気も作りたいと思った。

二つ目は、間違いを責めず、その背景を理解しようとする事だ。間違えたときは、その理由や事情があることを理解し、支えになれるようにしたい。

三つ目は自分が偏見や決めつけに流されないことだ。自分が持っている偏見により、相手を傷つけてしまったり、不快な思いにしまったりすることがあるかもしれない。そのため、よく考え、真実を知ろうとすることが大切だと思った。

罪を犯さないことが一番、大切だが、犯さないようにする環境、支える社会を作ることや、その支える社会を作るために社会生活の中で反省し、再犯を防ぐ保護観察のように見守ることがよりよい社会につながるっていくのだと思った。

罪を犯した人は一生罪を償うべきだが、それを支えるということも今の社会に必要なと思う。だから私は、そんな社会に近づくとともに、これからは意識を変えていきたい。

社会を明るくするために私たちにできること

蓮田市立黒浜中学校二年 和久井 雪邑

先日、テレビで子どもがネグレクト（育児放棄）されていた家庭のドキュメンタリー番組を見ました。部屋は、ゴミだらけで食事もなくに与えられず、まだ小さな子どもが一人で泣いている様子を映しだされていました。画面越しにもその子の孤独や不安が伝わってきて、胸が締めつけられました。「どうしてこんなことが起きてしまうのだろう」「大人は何をしていたのだろう」そう考えずにはいられませんでした。

このような現実を知ったことで「社会を明るくする運動」という言葉に、より深い意味を感じるようになりました。

これは、単に笑顔を増やすとか、街をきれいにするとしたことだけではなく、社会の中で見えにくくなっている苦しみや孤独に光を当て、誰もが安心して暮らせる環境をつくるための取り組みなのだと思います。

ネグレクトのような問題は、家庭の中という閉ざされた空間で起こることが多く、外からは気づきにくいものです。

しかし、その影響は深刻で、子どもが心身ともに大きな傷を負うこともあります。

あの番組で見た子どもも母親からほとんど声をかけてもらえず、笑顔を見せることもありませんでした。生きる力を奪われてしまったようなその表情が、今も心に残っています。

このような子どもたちを救うためには、家庭の中だけで問題を抱え込まず、地域や社会に、もっと

支え合う仕組みを作ることが必要だと感じました。

例えば、保育園や学校、地域のボランティアなどが連携し、「最近あの子の様子がおかしいな」と思った時、すぐに相談できる体制があれば、早期に支援を届けることができます。

また、私たち一人ひとりの「気づく力」や「声をかける勇氣」も大切です。

見て見ぬふりをするのではなく、小さな変化やサインに気づき、「どうしたの？」と一言声をかけることが、誰かを救うきっかけになるかもしれません。

誰もが孤立しない社会、誰かに頼ってもいいと思える社会、それこそが「明るい社会」なのではないでしょうか。

「社会を明るくする運動」は、決して特別な人だけが行うものではなく、私たち一人ひとりが日常の中でできる小さな行動の積み重ねだと思えます。

ゴミを拾う、困っている人に手を差し伸べる、子どもに笑顔で挨拶をする、そんなささやかな行動が、やがて大きな力になっていくと信じています。

あの番組を見てから私は、「誰かの心に寄り添える人でありたい」と強く思うようになりました。

そして、社会の中で苦しんでいる人がいたら、その存在に気づける目を持ちたい。声にならない声を受けとめられるような、そんな優しさを持った大人になりたいと思います。

社会の明るさとは、見た目の美しさや表面的な楽しさではありません。

心のつながり、支え合い、そして誰もが安心して生きられる場所があること、それこそが本当の「明るい社会」の姿です。

そして、その実現のためには、テレビの中だけではなく、私たちのすぐそばにある現実にも目を向ける必要があります。

私は、これからも小さなことからコツコツと社会を明るくする行動を続けていきたいと思えます。

そして、誰かの痛みに気づき、共に立ち上げられる社会を目指して、自分にできることを考え続けていきたいです。

埼玉県更生保護観察協会理事長賞

明るさの種と花咲く社会

春日部市立江戸川小中学校八年 細谷 心海

「社会を明るくする運動」という言葉は、テレビで聞いたことがある。でも正直、どんなことをするものなのかよくわからなかった。

でもある日、母が車を運転していたとき、道をゆずった相手が丁寧に二度もお辞儀をしてくれたことがあった。その姿を見て、私は心があたたかくなる気がした。もしかしたら、こうした思いやりのある行動が「社会を明るくする運動」ということなのかもしれない。

学校でも、あいさつ運動があったり、良い行いをした人に「ひまわり賞」が贈られたりする。そんな活動に目を向けるようになって、少しずつ「社会を明るくする運動」の身近さに気付き、どんな人でも社会を明るくすることはできるのだと感ずるようになった。

でも、いいことをしている人の姿が、いつも誰かに見られているわけじゃない。

それでもそっと、手を差し伸べてくれる人はちゃんといる。けれど、そういう優しさは、時に自分をすり減らしてしまうこともある。

「やさしくしなきゃ」と思いすぎて、つらくなってしまふことだってある。私も、人の気持ちを考えすぎて、疲れてしまうときがある。でも、それでも「やさしくしたい」と思えるのは、きっと誰かのやさしさに救われた経験があるからだ。

私の母は夜勤の仕事をしている。それでも毎日、朝早く起きて朝ごはんを作り、洗濯も掃除もすべてこなしていた。私はそのことをずっと「あたりまえ」のように感じていた。

でもある日、母が倒れて入院してしまった。

家の中がしんと静かになった。入院した母がいない間、ごはんもなく、洗濯物が少しずつたまって、気がつけば山のように積みあがって、家の中が乱れていく。

「お母さんって、こんなにもたくさんのお母さんをしてくれてたんだ」と、そのときはじめて気づいた。毎日、眠たい体を無理に起こして、私たちのために動いてくれていたのだ。

私は母がいない生活を通して、はじめは家事がめんどくさいなと思っていたけれど、母がどれほどのことをあたりまえのように身を削ってこなしているのか気付き、ありがたさを感じて、それと同時に母のことが心配で恋しくてたまらなかつた。きっとそれは、母が見えないところでずっと続いていた、静かで、けれど確かなやさしさだった。

母のいない時間が、私にやさしさの重みを教えてくれて、やさしさに甘えた自分に初めて向き合うことができた。あの日から私は、進んでエプロンをつけるようになった。

まだまだ母のようににはできないけれど、洗濯物をたたんだり、ごはんの準備を手伝ったり、できることを探すようになった。

それは命令されたからでも仕方なくでもなく、「やりたい」という気持ちからだだった。

今まで受け取ってきたやさしさを、少しずつ返していきたい。それがきつと、社会を明るくする一歩なのではないだろうか。

あのときのことがあったて私は、「やさしさ」というものがあたりまえではなく、静かに心をあたたく包み込んでくれて、そばにただで安心できるものだと思えた。

そして、やさしさは受けとるだけでなく、自分からもやさしさを返すことで、周りの人の心をあたたかくできるのだと知った。

今では、できる限り毎日家事を手伝ったり、母に声をかけて支えるようにしたりしている。

豆腐を頑張つて切つても原型を留めていなくて母に笑われたけれど、「ありがとう」と言ってくれたら、少しづつ自信が持てるようになった。

そんな日々を重ねるうちに、「やさしくすること」は特別なことじゃなくて、誰でもできる「明るさの種」なんだと感じるようになった。

「社会を明るくする運動」は、大きなことをしなくても、こうした思いやりや行動の積み重ねの中にあるのかもしれない。

誰かが「明るさの種」に救われて、また別の誰かに「明るさの種」を返し、心に花を咲かせ続ける。その連鎖が少しずつ社会を照らしていくのだと思っている。

だから私は、これからも誰かの思いに気付き、自分にできるやさしさを行動に移していきたい。たとえそれが小さな一歩でも、社会を明るくする運動の一部なのだ信じて。

そして、いつか誰かが困ったときに、私のやさしさがその人の支えになってくれたらうれしい。それは目立つことでも表彰されることなくいい。やさしさはきつと、見えないところで陽だまりのように力を発揮するから。

誰かの心にそっと寄り添い、笑顔を咲かせるようなぬくもりを届ける。

そしていつか、「明るさの種」となり、社会のあちこちに花を咲かせていく。

私もそんな「明るさの種」を届けたい。



埼玉県更生保護女性連盟会長賞

みんなの社会

さいたま市立宮原中学校一年 阿久澤 快斗

私たちが暮らす社会には、さまざまな人がいます。笑顔で毎日を過ごしている人もいれば、心に悩みを抱えてつらい気持ちでいる人もいます。「社会を明るくする運動」は、そんなすべての人が、少しでも安心して、温かい心で生きていける社会を目指す取り組みです。私はこの運動を知ったとき、明るい社会とはどんなものなのか、そして自分にできることは何かを考えました。

明るい社会とは、ただ非行や犯罪が少ない社会というだけでなく、お互いに思いやりを持ち、困っている人に自然と手を差し伸べられる社会だと思います。誰かが孤独を感じているとき、優しい言葉をかけられる人がいる。誰かが間違いを犯したとき、非難するだけでなく、その人が立ち直れるように支え合える。そんな社会こそが、真に「明るい社会」だと思います。

私は小学生のころ、学校で友達のひとりがいじめのようなことを受けていたとき、見て見ぬふりをしてしまった経験があります。関わりたくないと思ったからです。でも、後になって強く後悔しました。もしあのとき、自分が勇気を出して「やめたほうがいいって」と声をかけていれば、その子は少し救われたかもしれないと思いました。その経験から、私は「何もしないこと」もまた、無関心という形で社会を暗くしてしまうのだと気づきました。

「社会を明るくする運動」は、警察や地域の人々が中心となって行われていますが、本当に大切なのは、自分たち一人ひとりの意識だと思います。誰かの心に寄り添うこと、小さな思いやりを行動に移すこと。たとえば、困っている人に手を貸す、ゴミを拾う、ルールを守る、感謝の気持ちを伝える。

そうした小さな積み重ねが、明るい社会をつくる第一歩になるはずで

す。今の時代、SNSなどで人との関わり方が変わり、顔を合わせずに傷つけ合うことも簡単になってしまいました。だからこそ、私たちは「優しさ」や「つながり」をより大切にしなければならぬと感じます。言葉には力があります。たった一言で誰かを笑顔にすることも、逆に深く傷つけてしまうこともあります。常に人の気持ちを考えて行動しなければなりません。なので、私はできるだけ人を笑顔にできるような言葉を選んで話すように心がけています。

明るい社会は、一人の力では作れません。でも、誰かが最初の一步を踏み出せば、その行動はきっと周りの人に伝わっていきます。優しさの輪が広がれば、地域が、社会が、そして世界が少しずつ明るくなっていくと信じています。

私はこれからも、日々の生活の中で「社会を明るくする行動」を大切にしていきます。自分たち一人一人は、自分の行動が誰かの心の支えとなり、社会に小さな明かりをともしようとする存在になれると思います。

埼玉新聞社長賞

雰囲気作り

川口市立安行中学校二年 千代岡 晃佐

「おはようございます」。私は、この言葉を自分から言えるように毎日意識している。登校途中で出会った近所の人、同じ方向に向かう同級生、学校の正門で迎えてくれる先生方。一人ひとりに心を込めて挨拶をすることが、私の一日の始まりである。

しかし、この挨拶という行為について深く考えるようになったのは、ある出来事がきっかけだった。それは中学1年生の夏のことである。

〈部活動で学んだ挨拶の大切さ〉

私は剣道部に所属している。今現在も顧問の先生が指導してくれているが、その中でも特に印象的だったのは、挨拶に関する教えだった。

「勝負は生活の中にある。」先生がよく口にして言っている言葉である。この言葉は、自分から先に挨拶ができないければ、剣道では相手に先に打たれてしまう。また挨拶の声が小さければ、剣道の発声が小さく技が決まらない。そういった言葉だと私は思う。なので、私は日々の挨拶を大切にしている。

先生に挨拶をしたとき、いつもより声が小さかったことがあった。その時先生に「どうした元気がないな。」と言われたことがあった。確かにその時は元気がなかったような気がした。また、他の学校の先生に会った時に毎回挨拶をすると、その先生が私に話しかけてくるようになった。このように私は、挨拶は人の印象や相手の感情を知ることができる大切なものだと感じた。

最初は挨拶が形式的なものだと思っていた。しかし、日々の練習を通して、挨拶がチーム全体の雰囲気を作り上げていることに気づいた。元気な挨拶から始まる練習は活気に満ちていて、お互いを思いやる気持ちも自然と生まれた。逆に、挨拶がおろそかになった日はなんとなくチームワークもぎくしゃくしてしまうのだった。

〈クラスメイトとの出会い〉

部活動での挨拶の大切さを学んだ私は、日常生活でも積極的に挨拶をするようになった。そんな中で起きたのが、クラスメイトのA君との出来事である。

A君は入学当初から無表情で、クラスでもあまり話をしない人だった。多くの同級生は彼と距離を置いていたようだが、ある朝、私は勇気を出して「おはよう」と声をかけてみた。A君は振り向くと驚いたような表情を見せた。そして少し間をおいて、小さく「おはよう」と返事をしてくれた。それから毎日、私は意識してA君に挨拶をするようになった。最初はぎこちなかった彼の返事も、日が経つにつれて自然になっていった。そしてある日、彼の方から「今日は寒いね」と話しかけてくれたのである。

〈挨拶が築いた信頼関係〉

その何気ない会話をきっかけに、A君と少しずつ話をするようになった。休み時間に一緒に過ごすことも増え、彼の意外な一面を知ることができた。特に家庭の事情で悩みを抱えていることを知った。A君の両親は共働きで忙しく、家庭での会話が少ないという。学校でも友達との関わりを避けてしまいいつも一人で過ごしていた。彼は「誰も自分のことを気にかけてくれない」と感じていたのだ。しかし、毎日の挨拶を通して、彼は「自分を見てくれている人がいる」と実感できるようになったという。たった一言の「おはよう」が、彼の心の支えになっていたのである。この体験から、挨拶には相手の感情を読みとり、何気ない会話を生み出す力があることを改めて実感した。

〈犯罪・非行防止への思い〉

A君との交流や部活動での経験を通して、犯罪や非行に走る人の多くは、孤独感や疎外感を抱えているのではないかと考えるようになった。誰からも気にかげられず、社会から取り残されたような気持ちになった時、人は間違った道に進んでしまうかもしれない。しかし、日々の挨拶を通して「自分を見てくれる人がいる」「自分は一人ではない」と感じることができれば、そのような道を選ぶことを防げるのではないだろうか。

犯罪や非行のない明るい社会づくりは、決して難しいことではない。まずは「おはようございます」「こんにちは」「お疲れさまです」という日常の言葉から始めればよいのだ。一人ひとりが挨拶を大切にすることでお互いを思いやる温かい地域社会を築くことができる。私は信じている。明るい社会づくりは、今日という日の「おはよう」の一言から始まるのである。



解 説

更生保護制度(こうせいほごせいど)

犯罪や非行をした人たちが地域社会の中で更生する(立ち直る)ことができるように、必要な指導や援助をして、健全な社会の一員として生きることを助ける制度です。

保護観察所(ほごかんさつしょ)

保護観察所は、各都道府県庁所在地(北海道には4か所)に置かれており、更生保護の業務に従事している法務省の機関です。埼玉県には、県庁前の法務総合庁舎に「さいたま保護観察所」があります。主に、家庭裁判所の決定により保護観察になった少年、刑務所や少年院から仮釈放や仮退院になった人、保護観察付きの刑執行猶予になった人などに対して保護観察(生活の目標や指針を定めてそれを守るように指導監督する一方で、就職の援助や宿泊所の提供などの補導援護を通じて、立ち直りを促進しようとするもの)を実施しています。

“社会を明るくする運動”(しゃかいをあかるくするうんどう)

法務省主唱の“社会を明るくする運動”～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な明るい社会を築こうとする全国的な運動です。

〈“社会を明るくする運動”に取り組む更生保護ボランティア〉

保護司(ほごし)



法務大臣から委嘱されたボランティアで、地域の実情や習慣をよく理解しているという特性を生かして、保護観察所職員である保護観察官と一緒にあって、保護観察を受けている人の立ち直りを支援する活動や、地域の方々に立ち直り支援への理解と協力を求める活動などを行っています。全国に約46,000人(埼玉県内には約1,400人)がいます。

協力雇用主(きょうりよくこようぬし)



犯罪歴や非行歴のため、仕事に就くことが難しい人達を、その事情を理解した上で雇用し、立ち直りを支援する民間の事業主です。全国に約25,000(埼玉県内には約750)の協力雇用主がいます。

更生保護法人(こうせいほごほうじん)

埼玉県内では、更生保護事業法に基づく2つの更生保護法人（埼玉県更生保護観察協会と更生保護施設清心寮）が、さいたま保護観察所と協力して活動しています。

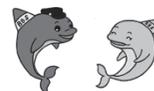
埼玉県更生保護観察協会は、更生保護に関する連絡調整・資金援助・広報を主な目的として活動している民間団体です。

更生保護施設清心寮は、住居や頼るべき人がないなどの理由で自立することが難しい人たちに、宿泊場所や食事を一定期間提供するほか、必要な援助や指導を行うことで、その円滑な社会復帰を支援している民間の施設です。



更生保護女性会(こうせいほごじょせいかい)

地域社会の犯罪・非行の未然防止のための啓発活動を行うとともに、青少年の健全な育成を助け、犯罪をした人や非行のある少年の改善更生に協力することを目的とするボランティア団体です。全国に約11万の会員（埼玉県内には約4,300人）がいます。



BBS会(Big Brothers and Sisters Movement)

非行など様々な問題を抱える少年に、兄や姉のような身近な存在として接し、相談相手となって、少年の自立を支援する「ともだち活動」などの非行防止活動を行う青年ボランティア団体です。全国に約4,500人の会員（埼玉県内には約100人）がいます。

〈“社会を明るくする運動”に取り組むその他の機関・団体〉

埼玉県県民生活部青少年課

埼玉県の青少年の健全育成と非行防止に関する施策を総合的に推進する業務を担当しています。



作文コンテスト
小中学生向けページ



作文コンテスト
先生・指導者向けページ



社会を明るくする運動
ウェブサイト



ホゴサラの部屋
(キッズルーム)

入賞者一覧

小学生の部			
賞	学校名	学年	名前
全国保護司連盟理事長賞	加須市立騎西小学校	6年	関口 心春さん
“社会を明るくする運動” 埼玉県推進委員会委員長(埼玉県知事)賞	小川町立小川小学校	4年	高瀬 仁照さん
さいたま保護観察所長賞	羽生市立羽生南小学校	6年	杉本 彩純さん
	ふじみ野市立東原小学校	4年	野田 祥玄さん
埼玉県保護司会連合会長賞	羽生市立須影小学校	5年	西村 笑迦さん
埼玉県更生保護観察協会理事長賞	ふじみ野市立東原小学校	3年	堀 幸希さん
埼玉県更生保護女性連盟会長賞	加須市立騎西小学校	6年	関口 心春さん
埼玉新聞社長賞	宮代町立須賀小学校	3年	山本 幸奈さん

中学生の部			
賞	学校名	学年	名前
“社会を明るくする運動” 埼玉県推進委員会委員長(埼玉県知事)賞	鴻巣市立鴻巣中学校	3年	瀬尾 颯静さん
さいたま保護観察所長賞	草加市立谷塚中学校	3年	藤代 斗真さん
	宮代町立前原中学校	3年	川島 実生さん
埼玉県保護司会連合会長賞	蓮田市立黒浜中学校	2年	和久井雪邑さん
埼玉県更生保護観察協会理事長賞	春日部市立江戸川小中学校	8年	細谷 心海さん
埼玉県更生保護女性連盟会長賞	さいたま市立宮原中学校	1年	阿久澤快斗さん
埼玉新聞社長賞	川口市立安行中学校	2年	千代岡晃佐さん

※作品の公表・非公表については、御本人・御家族・学校等の意向を確認しております。

学校特別賞

本コンテストへの応募に際し、児童・生徒の皆さんに対して“社会を明るくする運動”について理解を深めさせるなどの積極的な取組を行い、“社会を明るくする運動”の推進に多大な貢献をいただいた学校に対する表彰として、学校特別賞が新設されました。

熊谷市立熊谷西小学校については、埼玉県から全国コンテストへ推薦した結果、その取組が認められ、見事、全国で1校限り（小学校・中学校各1校）の「丸善まなびのつながり賞」を受賞されました。

全国作文コンテスト 特別賞
丸善まなびのつながり賞

熊谷市立熊谷西小学校

埼玉県作文コンテスト 特別賞
“社会を明るくする運動”埼玉県推進委員会事務局長感謝状

三郷市立新和小学校
熊谷市立吉岡中学校

〈熊谷市立熊谷西小学校の取組〉

全校朝会で校長先生が“社会を明るくする運動”について講話を行い、その感想文として全学年の児童の皆さんが担任の先生の指導を受けながら作文を書いてくださいました。作文は本コンテストに応募するとともに学校内でも独自に審査を行い、優秀作品が校内に掲示されました。

〈三郷市立新和小学校の取組〉

児童の皆さんが作文を書くに当たって、担任の先生から“社会を明るくする運動”についてパンフレットやDVDなどを使った事前指導が行われました。

〈熊谷市立吉岡中学校の取組〉

生徒の皆さんが作文を書くに当たって、校長先生と生徒指導担当の先生を中心とする“社会を明るくする運動”の特別授業が行われました。

◇第75回 “社会を明るくする運動” 埼玉県作文コンテスト審査員

(順不同・敬称略)

埼玉県県民生活部青少年課長	山 口 将 毅
埼玉県教育局義務教育指導課主任指導主事	松 下 洋 介
埼玉県教育局義務教育指導課指導主事	田 中 速 夫
埼玉大学教育学部附属小学校教諭	小 川 祐太郎
埼玉大学教育学部附属中学校教諭	成 田 和 基
埼玉県保護司会連合会長	山 喜 光 明
埼玉県更生保護観察協会理事長	小 川 秀 樹
埼玉県更生保護女性連盟会長	青 木 照 子
埼玉新聞社編集局次長	山 関 美 和
さいたま保護観察所長	猪 間 徳 子

第75回 “社会を明るくする運動” 埼玉県作文コンテスト
入賞作文集

令和8年1月発行

編 集 法務省さいたま保護観察所 地域活動統括班

発 行 所 “社会を明るくする運動” 埼玉県推進委員会
法務省さいたま保護観察所内
〒 330-0063
さいたま市浦和区高砂 3-16-58
電話 048-861-8287

印刷・製本 関東図書株式会社

※本作文集の作品を引用・転載する際には、引用・転載元が「第75回 “社会を明るくする運動” 作文集」であることを必ず明記してください。

